

## CIEC 第 87 回研究会報告

テーマ   メディアリテラシーと対話型鑑賞  
日 時   2010 年 1 月 30 日(土) 13:30 - 17:00  
会 場   石川県立美術館  
司 会   高瀬敏樹 (北海道札幌旭丘高等学校)  
講 師   前田武志氏 (石川県立美術館学芸員)  
          奥本素子氏 (総合研究大学院大学助教)  
参加者   15 名

近年教育界において、子どもたちの言語力の低下について話題に上ることが多くなり、学習指導要領でも自分の考えを相手に対し明確に伝えることなど、すべての教育活動において子どもたちの言語力を育成する必要があるとされた。芸術系の科目では、すでに指導者と学習者の間でさまざまな対話の中から思考力や対話能力を伸ばす「対話型鑑賞」が実施されており、言語力の育成という面からも注目されている。この学習は、芸術分野のみを対象と捉えるのではなく、メディアを通じて指導者と学習者、学習者間などのコミュニケーション能力を高め、創造的な学習空間を創出する場と考えることもできる。本研究会は、対話を通じた鑑賞や分析をメディアリテラシーの視点から問い直すことで、メディアリテラシーの授業実践に新たな可能性を提供する機会となることを目指した。



まず、石川県立美術館学芸員である前多武志氏より、「対話型鑑賞の取り組みと可能性」についてお話をいただいた。石川県立美術館では、どこでもミュージアム(学校出前講座)として平成 17 年より対話型鑑賞を実施し、毎年平均 2,000 人の生徒に対し対話型鑑賞を行っている。本研究会では、対話型鑑賞について未経験の参加者が多いため、実際に前多氏の指導で美術館内の 2 つの作品について対話型鑑賞を体験した。指導者が一方的に作品について解説するのではなく、作品を前にした学習者に対しさまざまな問いかけを行い、各自の作品に対する解釈を理由も挙げながら自由に語り合った。両作品とも、一見しただけでは何を描いているかわからないものであり、鑑賞する人ごとにさまざまな見方をしていることに参加者同士で気づくことができた。さらに自分の考えのみならず、他者の意見を取り込みながら解釈を発展させるなど、対話の中から新たなものの見方、考え方が生まれることを実感することができ、対話型学習は非常に興味深く、そしてなにより楽しいものであった。その後、対話型鑑賞の歴史として、1980 年代よりアメリカで始まったヴィジュアル・シンキング・カリキュラム (VTC) やアメリカ・アレナスによる日本での実践について、また対話型鑑賞の学術的な理論の 1 つとしてマサチューセッツ美術大学のアビゲ

イル・ハウゼンによる「鑑賞能力の発達段階」について解説していただいた。ハウゼンは鑑賞能力を5段階とし、作品を自分世界に当てはめようとする主観中心という初期段階から、さまざまな知識や作品の背景を知ること、最終的には作者の意図に敬意を払い、作品と自由に対話するかのような深い思索にたどり着くとしている。

また前多氏の経験から、対話型鑑賞を行う際の作品選定の視点として物語性、多様性、親しみやすさ、作品の流れ、文化との関連性、難易の段階について考慮することが重要であることが紹介された。また、対話型鑑賞の課題として、知識をどの程度鑑賞に持ち込むべきかというジレンマのようなものがある。自由な対話を引き出していく上では知識が邪魔をしてしまう点も否定できないが、全く事実と異なったりする場合には、正しい知識による対話の方向修正が必要となる場合もあるからである。最後に、前多氏から「子どもたちの作品を鑑賞する多様なまなざし」が大切なのであり、そしてそれをうまく受け止めるためには、ある程度「正しい方向へ導いていく」手助けが必要であるが、同時に「1つの答えに持っていくようなことはしない」、という姿勢が重要であることが示された。

次に、総合研究大学院大学助教である奥本素子氏より、「メディアリテラシーと対話式美術鑑賞法」について講演をいただいた。まず対話型鑑賞についてメディアリテラシーの視点からの解説があった。メディアリテラシーはそれまで分析中心であったが、1985年ころ、対話を通してメディアリテラシーを育む重要性についての考え方が生まれ、Buckinghamらによって研究が進められた。Buckinghamのメディアリテラシー教育は、対話の中から子どもがすでに持っている知識を明らかにし、さらにその知識を体系化し、結論や法則を導き出すことである。またその知識についての基盤が何であるかの疑問を感じさせるように促し、知識をさらに拡張させていく。

またGreenhillは博物館において、さまざまな資料を閲覧することによって展示物の特徴をつかみ、展示物ごとの関連性を見出し、その過程を経て展示テーマを理解する能力が博物館リテラシーであるとした。つまり展示物のテーマを理解するには、展示に対する注目点を把握することが重要であり、それらの能力は熟達者をもつ視点であって、通常かなりの背景知識や経験が必要である。

初心者、子どもたちにとって作品1つ1つの解説を行っていただけでは資料の関連性、注目点に気づきにくい。また、美術鑑賞発達の5段階のステージが次の段階へと移動するためには、鑑賞者自身の概念変化が必要であり、鑑賞作品の数を増やすだけではなかなか概念の変化まで達成することができない。そこで鑑賞の前に展示テーマ全体に関する解説を行うことができれば、鑑賞者は注目すべきポイントを押さえた鑑賞を行うことが可能となる。これにより、鑑賞者自身が各資料の共通点や相違点などに気づき、展示テーマに沿った主体的な鑑賞が行えることとなる。奥本氏はその流れを博物館認知オリエンテーションモデル (Cognitive Orientation of Museum : COM) とし、その認知活動を補助するCOM教材を開発した。



COM 教材を用いた実践事例としてバルビゾン派の風景画の鑑賞例が挙げられた。バルビゾン派についての背景知識や見るべきポイントを知らない初心者にとっては、各作品の解説教材を見ても、どれも似たような風景画としか映らず、鑑賞時間も短く、鑑賞後に記すワークシートの記述も少ない。しかし COM 教材を用いることで、これまで熟達者のみが持っていた知識（バルビゾン派は自然の表情の変化、つまり空と雲を描いている）を得ることができ、初心者でも鑑賞するべきポイントを把握することができる。このことにより、鑑賞時間、事後のワークシート記述量ともに増加した。また記述の内容についても、単なる感想の羅列ではなく、キーワードごとのつながりを持った記述が行えていることがマインドマップの分析から明らかとなった。つまり、鑑賞者の各作品への知識量を増やすのではなく、COM 教材によって「視点」を明確にさせることにより、鑑賞者自身の各作品への解釈や関連性の発見を引き出すことができるのである。

前多氏、奥本氏の講演の後、「メディアリテラシーと対話型鑑賞の関係、今後の可能性」について参加者の意見交換が行われた。主に対話型鑑賞における知識の位置づけをどうすべきか、という点についての意見交換となった。「鑑賞者の自由な解釈による対話によって本当にこの作品を鑑賞した」と言えるのか、また「美術作品についての先行知識、背景知識が必要であるならば、あらゆる教科で行われるべきメディアリテラシーの活用という観点から見ると、やはり教材として敷居が高いのではないか」などという意見があった。これに対し、作品は確かにある程度「正しい解釈」というものは存在するものの、対話を通すことで多様なものの見方をすることができることも確かであること、また楽しさの中に正しい知識があつてこそ妥当な読解、解釈が可能となる、などの意見が出された。

また、対話型鑑賞をメディアリテラシーの手法としてあらゆる分野で利用するためには、自由かつ本質から逸脱しないための範囲の設定と、その仕組みをフレームワークとしてどのように設計していくかが重要である。それには教員、専門家、民間企業などと連携し、各担当者が求める分野とその内容を分担しつつ、協力しながらシステムを作り上げていくことが重要である、という意見が出され、本研究会の終了時間となった。

（文責：鳴門教育大学大学院 永野 直）